

傳承

六郎左衛門物語

蒲江町・竹野浦河内

吉田勝

(八十三歳)

わが佐伯藩領主毛利氏、初めのころの物語りである。ある日、いづこからともなく河内入江(竹野浦河内)、鍛冶松の里に一人の中年の男がやって来て、鍛冶屋の主人に「仕事に使ってくれないか」という。見ると立派な人物ゆえ、主人は「野鍛冶の私におなた様のような方を使うほどの鍛冶ではありませぬので」と断わった。しかし「是非に」との願いに断わりきれず、「ではしばらく居なされるがよい」と住み込むこととなった。名前が六郎左衛門と名乗り、風彩まことになりつて主人物であった。仕事は全く無経験であったが、精神こめての立働きの、このところ主人も信頼を深めていた。時折「お前が日当だ」と、いくらかの賃銀を与えようとすると、「おなたにお預けしておきます。私入用の時にいただきます」と、全く敵のない男であった。

ある時、元禄山で殿様の猪狩りがあるとお触れがあり、当日は河内はもとより、近所浦々の百姓たちは、反んな勢子の役を申しつけられた。六郎左衛門は主人の代理として勢子の一団に加わり、元禄山に出かけた。元禄山に行くと、弓の峠に殿様の本陣があり、そこに向って猪や鹿の獲物の進出するが勢子の役であった。六郎左衛門も追い手が弓の峠に近づく、一匹の犬が本陣へ向ってまわしぐらである。すわとばかり五、六人の武士が弓を射左が当らない。「すわ、殿様の御身が危険」と見

てとつた六郎左衛門、傍らの武士の弓をとり、一矢で大猪を射止め、並み居る人々、やんやのかっさいであった。

「天晴者よ、徳美とらせよ」と大い下面目をほいこし、その夜は蒲江浦の飯屋(宿所)に連れて行かれたが、何を考えたか「只今よりこの手紙を持って城下へ(佐伯)まで届けよ」との命令である。左で一人仰せをうけて蒲江浦に後に、峠を越したそのの行く手に群がる山犬である。不吉と感じて一匹の山犬と取り押さえ、着物の包んで蒲江に引き返し、山犬に渡されて行けないことを話すと、「平当か。証拠があるか、見せる」というので、着物ごとくと、山犬は武士に向って食いさがる。武士は悲鳴をおげて「早く取り押えよ」と言う。六郎左衛門の拳骨一撃で山犬は倒れた。

その様子を見た重役連中、「お前は何か、隠すと身のためならぬぞ」とねめつた。六郎左衛門は「私はあやしむ者ではありませぬ。私も昔は武士でありました。故あって流浪の身」といえば、「その故とは何か、はつきり言え」と問いつめられ、「私は妻に死別され、子供を残してかく落ちぶれて居ります。その事情だけはお許しのほどを」というので、この旨を奥の間の殿に言上した。

毛利公はきいて「其の者の言い分にも理がある。わしをぬらう者ならぬ、あの危機に猪を射止めるはずがない。許してつかわせ」とのお言葉であった。そして重役を通じて六郎左衛門に申し付けた。

「明日蒲江町を、寸尺を持たず、歩尺で測量し、反別を出せ。面積が正しく出たら、その田地はそのちに取らせるとの御説であるぞ」とのことであった。殿様の心中は、こやつ、思おぬ極り出し者ではないか」とそう考えていた。歩尺とは量綱を用いず、歩則し歩いて足敷

で測ることである。

「歩尺の測量、土つがじとは存じますが、殿のご命令とおれば及ばずながらお引受け致しますよう」と引受け

翌日は、殿様臨席のもとに測量がはじまった。六郎左衛門は殿に一礼し、静かに田の周囲をまわりはじめた。そして廻り終ると計算をはじめ、やがて「三町六反三畝六歩」と声高らかに申し上げた。そこで早速実測したら、六郎左衛門の報告通りであった。

殿様は大変感心し「おしに仕えてくれぬか」とのお言葉である。六郎左衛門は「お言葉まことに有難くは存じますが、ご領内は今のまま暮らさせていたなき度く存じます」と言上した。殿様「それではこの田を全部、約束通り手取りとらせる」ということになった。

しかし、この三町歩余の田地は、六郎左衛門が独占しおわけてなく、希望者におわけて耕作させ、河内から北耕作に出かけていたそうである。そして後日この水田を、高山湾の浦江に属する漁場とを交換したそうである。それはまだ遠い昔のことではない。六郎左衛門はその後も毛利公の親愛を終身受けていたとの話ではあるが、士分に取られ立てられたとか、俸禄などいふただいた話ではない。

なお、当時は入津湾内外の漁区が少なく、よく喧嘩をしていた時代で、六郎左衛門はその節度を作るため、河内の漁師を他の湾内へ行かせず、他の浦の漁師が来て横暴な行動をすれば、船も網も陸に上げさせ保留することとした。このことは河内だけのことでなく、他の浦々にもお互いの漁区を尊重しあうこととなり、今も漁区の間は守り続けられている。

六郎左衛門は妻を迎えず、河内で生涯を終ったそうである。

あるが、伝える所によると、六郎左衛門はある藩の家老職であったが、妻に死別された。たまたま殿の参勤の留守中に奥方に懸想され、あらぬ噂まで立つたので、自分の身をかくして、河内の浦に隠棲するに至ったのだという。

なお六郎左衛門の歿後のことである。後日物語がつづく。

六郎左衛門の一人娘が、辺境の父を慕うて、家僕と共に金品を携え、はるばる船で入津の海を志したところ、心ない土地のものの手にかかり、主従二人とも悲惨な最期を上げたと伝えられ、今もひそやかに語り継がれている。

（編集者付記）

○吉田氏は去る昭和五十年、本誌第九十九号に、竹野浦河内物語を著して下さっている。今回の伝承物語で添えがき、

「この物語りは、河内に位牌を祭っている家もあるから、書いてみました。空句の悪い前は訂正願います」とある。しかしなるべく原文を尊重し、高麗の方にはふさわしい伝承記録として、ここによそくで掲載しました。

○元嶽山での殿様の指符（渡符）、実際は元文年間六次高麗にまつて行なわれている。その後もある日は二度あったか、いずれにしても初めかころではない。伝承だから史実と間違えても止むを得ない。

○六郎左衛門が貫ったという三町六反余の水田は、高山から元嶽の海岸まであるのか。高山の水田開発については、浦江浦にも伝承がある。娘が老父を慕って河内に船で来る途中、非業を最期をとげたことは、西野浦の、うつろ船伝承（本誌八十七号昭和三十三年三月）の白い紙である。民話・伝承物語の一面目点である。

○吉田氏は本会の正観会員ではない。しかし会友として、今後よろこんで伝承を提供したい。次の記録を期待したい。